

「訪中団に参加して」 安東 万瑠花

訪中団に参加させていただき、特に印象に残ったことを以下に2点述べる。

まず1点目は歴史的な建築物を見たり実際に登ったり、普段入ることのない人民大会堂に入る機会があったということだ。その中でも万里の長城に登ったことが最も印象的である。万里の長城は中学生の頃から歴史の教科書で名前は聞いたことがある程度で実際に見たことは1度もなくて、バスを降りると高いところに続く道が見えた。ずっと坂道が続くと思っていたため、実際に登ってみると階段ばかりが続き、登るのを諦めそうになったが頂上付近まで登ることができた。400年近く前に建築されたものが現代にも残っていて、その歴史あるものに自分が登っていることに神秘性を感じた。また、登っている途中で他国の観光客の方と連絡先を交換するほど仲良くなり、国際交流をすることもできた。

次に2点目は、中国の方のやさしさに触れることが出来たということだ。私は過去に大学の短期留学で3度、中国の青島を訪れたことがあり、今回で中国に行くのは4度目であった。毎回短期留学のたびに感じていた『中国の方々はあたたかく、やさしい』という印象を今回も受けることができた。例えば、天壇公園の近くのショッピングモールでの買い物中に店の機械の使い方が分からず友人と困っていると、店員さんが途中から操作の手伝いをしてくださったという経験をした。それだけではなく、学校交流で漢方作り体験をした際に、現地の大学生が少しの日本語で私たちに一生懸命説明してくださったり、移動のバスに乗ると毎回水をご用意してくださっていたりなど、日本でも数年前によく言われた『おもてなし』の精神がそこにはあったのではないかと感じた。

以上2点が印象に残ったことである。中国に行ったことのない私の身の回りの人から『中国人は冷たい』や『人口が多いから他人に無関心そう』『治安が悪い報道をよく見るから怖そう』などと否定イメージを耳にしたことがある。私は毎回『中国の方々がやさしいし、文化は違っても日本人と変わらない』とその人たちに言うのだが、もしそのようなイメージを持っている人が他にもいるのならば声を大にしてそう伝えたいと思う。国や文化が違っても人は心と心で通じ合えると私は考える。マイナスなイメージを実際に自分の目で見てもない時からもつのはやめて、積極的に興味を持つとすることが国際交流の第一歩であると考えている。私にとって、中国はアナザースカイであると今回の訪中を通して再認識することができた有意義な5日間であった。また機会があればぜひ参加させていただきたいと思っている。このような貴重な機会をくださった日中友好協会の方々、また訪中でお世話になったすべての方々へ感謝の意を表す。ありがとうございました。

「初めての中国」 上田裕太郎

私は、中国に行くのは初めてでとても楽しみにしていたのと同時に不安もありました。その不安というのは、ほかの大学の知らない人と中国に五日間一緒にいくことと、PM2.5が飛んでいて空気が汚いということだ。

しかし事前研修で友達もたくさんでき、みんなと仲良くすることができた。北京に着くと空気は汚くマスクをしないとやばいのかなと思っていたが日本と何も変わらなかった。今回の訪中をきっかけに日本でよく報道されていることが中国のごく一部で起きたことということが分かった。日本のメディアはその悪い情報を中国の全てが悪いように報じていると感じた。

この訪中をきっかけに中国の今を知っただけでなく全国の大学の人と友達になることができ素敵な出会いを感じることもできた。皆が中国語を勉強しているわけではなく経済学部や教育学部、医学部の人もいた。5日間中国に滞在し様々な場所を皆と共に観光することができた。

その中で私が印象に残っているのがテレビでしか見たことのない万里の長城や天安門広場にも行ったことだ。万里の長城では行ってみたいと分からないことがたくさんありその中でも私が一番驚いたことは万里の長城はずっとゆるやかな坂道を上ると思っていたが実際は階段がほとんどでその階段も高さが低いものもあれば高いものもあった。頂上まで行くのはとてもしんどく簡単なことではなかったが友達と喋りながら途中のお土産屋さんに寄ったりしていると楽しく上ることができた。昔の人が侵入を防ぐために作られたもので昔に作られたものとは思えない大きさととても大変な作業だったと思う。頂上からの景色はとてもきれいで苦労して上ってよかったと思った。

天安門広場では思っていた以上に広く日本では考えられないほどの広さだった。やはり中国の人口は多いのであれだけの広さがあっても普通なのかなと思った。日本から出発する前に天安門事件について少し勉強していったがガイドさんも日本語が上手で天安門事件についてもっと詳しく教えてもらうことができた。

最終日には訪中団のメインでもある日中大学生千人交流大会が人民大会堂で行われた。人民大会堂で開催されると聞きとても驚いた。普段は誰でも入れるような場所ではなく私たちも招待状をいただき、入るときには手荷物の検査とパスポートのチェックがありまるで出国手続きのようでした。中はやはり千人が交流できるだけの広さがあった。しかし、学生同士の交流をする機会がなかったのが少し残念だった。

今回の訪中は普通ではできないことを経験させてもらい、日本と中国の文化の違いや、場所の大きさなどをこの目で確認することができた。そして中国語以外のことを専門としている人から様々な話を聞くことができた。自分が今まで学んできた中国語を使う機会もあり自分の今の中国語のレベルを知ることができた。中国語を学ぶ上ではいい刺激を受けることができた。中国語を

上達させて人の役に立てるようになりたいと思った。

このような機会をいただきありがとうございました。

「偏見と存外」 大窪洋望

訪中する前の、中国に対する私の印象は決して良いものではなかった。大都市は空気が悪く、トイレは汚い。そして中国人は不愛想である、といった悪いイメージばかり私は持っていた。友人から聞いた話やニュースの報道、日本を訪れる中国人観光客を見て、私は勝手に中国がどういう国なのか、中国人がどういう人なのか決めつけてしまっていた。しかし実際に訪中してみて、思っていたほど空気は悪くなく、トイレも汚くなかった。そして何より、優しい中国人がたくさんいた。道を尋ねると丁寧に説明してくれた他、お土産を大幅に値引いてくれるなど、彼らはとても優しくかった。もちろん不愛想な人もいたが、私の中国人に対する印象はガラッと変わった。また、中国の IT 化は予想以上に進んでいた。現地のほとんどの人は、買い物をする時は現金で支払うのではなく、スマホで決済をしていた。街中の至る所にはライドシェアリング用の自転車が置いてあり、現地の人はスマホを使って料金を支払い、それらを利用していた。さらに、私たちが訪れた若者の企業関連施設では、エレベーターを動かす時にもスマホを使っていた。中国では多くのことがスマホ 1 つでできるということを聞いていたが、私にはそれが想像できなかった。日本ではまだまだ現金支払いが主流であるし、スマホを利用したライドシェアリングもあまり普及していない。日本で生活していると考えられないようなデジタルな生活を中国の人々は送っていた。

私は今回の訪中を通して、何事においても自分の目で実際に確かめてみるのが重要だということを実感した。友人の話やニュースの報道などは、その事柄のほんの一部を切り取ったに過ぎない。もしかしたら、良い部分だけを切り取っているかもしれないし、逆に悪い部分だけを切り取っているかもしれない。また友人や記者は、彼らが得た情報に自分なりの解釈を加えて他の人に伝えている可能性もある。つまり、私たちが彼らから受け取る情報は客観的なものではなく主観的なものである可能性があるということである。彼らの主観と私たちの主観が常に一致するのであれば問題はない。しかし、人によって考え方や感じ方は異なるため、彼らの主観と私たちの主観が一致しない場合もある。その場合、私たちはその事柄に対して誤った認識をしてしまう。それを防ぐために、実際に自分の目で確かめるのが重要だと私は考える。中国に関しても、実際に現地を訪れ、中国はどのような国であるのか、そして中国人はどのような人たちであるのかを自分の目で確かめたことでそれまでの良くないイメージは一変した。また、想像していたよりも中国は IT 化が進んでおり、実際に現地を訪れなければ、中国が日本よりこんなにも発展しているということに気づくことができなかったと思う。これからは自分の心の中にある偏見を疑い、そして自分の目で実際にそうであるのかを確かめていこうと思う。そうすれば、存外な結果を見ることができるとも思えない。

「初心に戻った訪中」 岡村美都紀

今回の訪中団に参加して、より中国が奥深くまた興味深い国であると感じました。私は大学生の間に 1 か月広州へ、1 年間の蘇州留学に行きました。ですが北京に行くのは初めてでした。初日空港に降り立った時、広すぎる空港を見てスケールの違いを感じました。バスに乗り外の景色を見ていると、少し田舎を感じる部分もありつつ、数時間するとオリンピック会場を通り、都会と古いままの中国が混在していました。歴史を感じる場所も非常に多く、ですが首都である都会の部分のどちらも感じられる良さがありました。中国は土地も広く、人口も多い。たくさんの文化と習慣が存在する、そこが日本とは違う中国の良さだなと感じました。私は中国留学を経験し、自分が感じている中国のいい部分が中国に行ったことがない人たちには伝わらない、そのギャップにかなり苦しみました。中国は汚い、うるさい、ニセモノなどマイナス意見もたくさん耳にしました。ですが今回の訪中団で約 200 人の同世代と交流し、中国に興味を持っていたり今回の訪中がきっかけで中国に興味を持ったり人がいることが勝手ながらうれしくなりました。同じ班では出身・学年・大学も違う、初対面の学生と活動できたことは新鮮であり、最終日には空港で夜まで語り合ったこともいい思い出となりました。中国では鳴り響くクラクション、スピードがでてるバイク、油が多い中国料理などみんなが驚いているのを見て、3 年前に初めて中国広州へ行き、自分の目で見た中国に衝撃を受けたことを思い出しました。中国現地では同年代の中国人学生と交流する機会がなく、中国語を話す機会が少なかったことが残念でした。

私が今回の活動で特に印象に残ったのは、テレビでよく見えていた天安門や普段は入ることのできない人民大会堂での千人交流会です。人民大会堂では私たちが使ったあとに、安倍首相と習近平国家主席が会談していたのに驚き、帰国後も家族や先生に自慢しました。人民大会堂に入る前に、バスで待ち時間があったのですがその時に隣が中国の大学生が乗っているバスでした。私たちはお互いに WeChat の QR コードを見せ合い、連絡先を交換しました。それぞれがお互いの国の言葉で連絡しあいました。この時に私はふとある言葉を思い出しました。それはホテル日航での事前研修で「日中友好のためには若い人たちが中国の良さを知り、自分の目で見て感じてきたことを周りの人に伝えることが重要となる。」このようなささいな交流により、人と人とのつながりが、国と国へとつながると身をもって感じました。また私は今回の活動で感じたことを、周りの人に伝えアウトプットしなければいけません。

日本旅行に来る中国人観光客が年々増えていますが、中国旅行へ行く日本人はまだまだ少ないです。食わず嫌いの人たちが少しでも中国に興味をもってもらえるように私たちがまず小さなことから行動しなければいけないと思いました。

「発展する生活と伝統文化が調和する中国」 川口真奈

私が中国に行って感じたことは主に 2 つある。それは生活やライフスタイルが変化しつづけている点と自国の文化を大切にしている点である。この二点を中心に、私が隣国である日本で生活をする者として私が滞在中に感じたことや考えたことを述べたい。

時代の変化とともに変わる国民の生活

私たち 5 班のバスガイドを務めてくださった岳さんが頻繁に説明してくれたことはこの数十年でいかに中国の都市や国民の生活が変化したかということだった。

数日間北京に滞在、生活をして数えきれない程の発見をした。その中でも特に印象深かったことは、実際にスーパーマーケットを訪れて感じた、通貨の形態である。中国への渡航が決定する以前より、中国ではもはや現金がほとんど使われていないことは中国出身の留学生から聞いていたので知っていた。現地では主に使われているのはアリペイというアプリを利用したキャッシングサービスである。

実は今回の渡航前にアリペイが中国に銀行口座を持っていない観光客でもアリペイを利用できるサービスを開始した。そこで私は実際にそれを利用することに決めた。パスポートやクレジットカードの情報を登録するだけで簡単に登録が出来た。実際に中国国内で使ってみた私の感想は、便利であるという一言に尽きる。両替をする必要に迫られないことは、観光客にとって大きなメリットであると感じた。また財布を持ち歩く必要がなくなるので観光客にはもちろん、中国で生活をする人にとっても防犯の面から一つのメリットがあるように感じた。

自国の文化を大切にす

次に私が感じた点は自国の歴史や文化を尊重している点である。この点はレストランや観光地を訪れた際に強く感じられた。気づきの始まりは故宮博物院を訪れた際であった。ある門の前に二匹の獅子像があることに気づいた。像に向かい合い向かって右の像は球体を前足で踏みつけている一方で、向かって左の像は小さな生物を前足で踏みつけているように見えた。これらの像が何を意味するのか知りたくなり、ガイドの岳さんに尋ねると次のように説明をされた。これらは夫婦のように二体で一つを成すものであり、右の像が踏みつけているのは地球であり、つまりこの像は世界の権力者の象徴である。一方左の像が踏みつけているように見えたのはその像の子供であり、つまり踏みつけているのではなく遊んでいる。この像は母子の象徴である。家父長制の顕著な東アジアの伝統的な思想であると感じた。

この像に込められた意味もさることながら、より興味深く感じた点はこのような像が街においても見かけられる点である。もちろんレストランの前などではなく公的な建物であったり、万里の長城の麓にある立派な門の手前であったりしたが、文化を重んじていることを感じた。建物の文化に関して言えば学校や大学には門が置かれていることが多く、場所を区分する意味が門には込められているのではないかと考えた。

私が文化を大切にしていることを発見した理由の一つに、日本とは文化が予想していたよりも違うと身をもって感じたという理由がある。一見当たり前聞こえるが、これは私がドイツに一月間滞在していた際に、中国や台湾出身の学生に似ている文化や価値観を見出していたからに他ならない。もちろん日本の文化のほとんどは中国に端を発しており、ヨーロッパに似ているように感じていた中国の文化だったが、実際に現地へ行くと日本と似ていると感じるところか、隣の国と言っても文化の違いの大きさを痛感した。

終わりに

私は今回幸運にもこの訪中に参加できたが、この機会は私にとって人と人が交流することの貴重さを考える契機となった。たしかにこのような交流というのはすぐに目に見えるような成果を打ち出すものではないが、隣人として生きていく上での土台を私たち一人一人に築く尊い時間であると身をもって感じた。

現在の日本と中国の間には歴史認識の違いや領土問題など解決すべき、解決に至るまでの過程を歩むべき課題が山のようにある。隣国、隣人として、紆余曲折がありながらも戦後から現在に至るまでの関係を絶やさぬためには私たちがお互いを理解しようとする姿勢を常に取り続ける必要がある。文化が違う相手を理解することは可能であるとは言えない。しかしここで何より重きを置かれるべきことは相手を理解できたかどうかという結果ではなく、自分と異なる背景を持つ相手を「外国人」ではなく一人の人間として尊重し、理解しようとする試みである。

この訪中が決まった時は中国を訪れることができる喜びだけを感じていたが、事前研修会で戦争の反省を基に作られたという日中友好協会の成り立ちを知り、身震いがする思いだった。同時に私たちがそれを受け継いでいく覚悟と認識の必要性を認

識した。人民大会堂で頂いた言葉の中で私が最も強く覚えているのは「交流というのは現地で実際に人と会うことはもちろんだが、日々の生活の行動が重要である」という言葉である。私が今回、訪中団の一員として感じたことを友達や家族に伝えたり、私の日常生活の中で行動に移したりことが今後の日中交流の一步になると信じている。

久保菜乃巴

今回私がこの研修旅行に参加した目的は、中国学科の学生として今まで学習してきた中国語を実践的に利用し、それがどの程度通用するのかを確認したかったのに加えて、中国へ留学する際のイメージを掴みたかったのがひとつ。もうひとつは、中国に興味を持つ日本の他大学の学生との交流だった。

これらの目的に関していうと、まずは自分の中国語力の未熟さを痛感した。飛行機の中では CA さんに飲み物を頼んだりトイレの場所を聞いたりはできた。自分の話したことを相手が理解してくれた時はとてもうれしかったし自信になった。しかし機内放送や現地の店での買い物の際、レストランでの食事の際はネイティブスピーカーの話す速さに圧巻され、語彙力の少なさのために理解にも苦しんだ。中国に留学して現地で生活するにはまだまだ勉強が必要だと思い知らされ落胆したが、今後の中国語学習のモチベーションにもなった。また、今回のプログラムに参加したことで自分の人生を豊かにしてくれる仲間にも出会うことができた。私が属していた5号車のメンバーは皆個性が強く、専攻している分野も学年も様々で、最初に感じていた不安も彼らのおかげで2日目には完全になくなっていった。自分は1回生で、同回生は自分含め3人、しかし他の2人は異性だったため心配していたが、上回生が多いことで大学生活のことや就職活動のことなどの話を多く聞くことができて、むしろ良かったと思う。彼らとは中国での最後の夜にはホテルの一室で夜中まで名残を惜しんでたくさん話をした。関西空港について後一緒に食事をし、また皆で集まろうという約束もして解散した。このような友人がこの5日間の中で得た最も大きなものだといっても過言ではない。

中国についてからは何もかもが日本と異なり驚きの連続だった。空港での指紋認証からはじまり、様々なシステムの自動化が進んでいることに驚いた。空港でも町の小さな商店でも QR コードやバーコードの読み取りによって携帯電話だけで支払いをすませることができ、大いに便利だと思った。現地の方で現金を利用して支払いをしている人は今回の滞在期間中には見なかったかもしれない。北京城市大学への訪問時には温かい歓迎をしていただき嬉しかった。私は漢方薬作り体験に参加した。実際に道具を用いて薬品を測ったり、薬の成型をしたりと文系では学校でおそらくできないであろうことができた。現地の学生は笑顔でやさしく教えてくれ、言葉が通じなくても何かを一緒にやり遂げることで達成感の共有ができた。今回の交流ではここまでだったが、キャンパスツアーや食事を現地の学生と出来たらより良い大学訪問になったと思う。また人民大会堂で行われた交流大会は、あのような大人数が集まっていたにも関わらず、時間の関係上中国の学生と交流できなかったのがとても残念に感じた。しかし5号車の隣に停まっていたバスに乗っていた学生らと連絡先の交換をすることができ、彼らが日本語学科の生徒だったということもあり、今でもお互いに言語を教えあったり、計画している上海旅行の際のお勧めを聞いたりと連絡を取り合っている。中国人は日本人に対してどう思っているのかが不安だったが、現地の学生は積極的に私たちと関わろうとしてくれていて安心し、本当にうれしかった。日本語学科で日本語や日本文化を現地の大学生が勉強してくれているとわかったため、自分も中国学科の生徒として中国語のみならず、中国の文化・政治にも関心を持って知識を増やしていくとともに、日本のことを彼らに自信をもって話ができるようになっておかないといけないなという自覚も改めて感じた。

また、この研修旅行中には中国の観光地にも足を運んだ。特に印象に残っているのはやはり万里の長城である。自分の足で頂上まで登ってみた景色は忘れられない。下りは、頂上付近にあった売店でアイスを買って、みんなでシェアしながら戻ったのもいい思い出になった。ここでは様々な国籍の方と言葉を交わした。やはり学生との交流時のように用いる言語が異なってもあの険しい登り道を励ましながらか進み、頂上まで到着できたことで共に達成感を感じることができ、互いの間に笑顔が生まれた。天安門広場は写真や映像でしか見たことがなく、実際目の前にするとその広さや門の大きさに感動した。まさか自分が万里の頂上や天安門広場、人民大会堂の中にまで足を踏み入れるとは思ってもいなかった。人生で二度とないかもしれない機会を心に刻んだ。

5日間の食事はどれも豪華でおいしかった。なかには中国のスパイスが利いた料理や日本では出てこないような料理もあり、色んな中華料理が食べられて毎回の食事が楽しかった。万里の長城を登り切ったあとの昼食が一番おいしく、身に染みだ。

このように今回の研修旅行は、日本には気づけなかったことや体験できなかったこと、出会うことのなかったであろう人たちに巡り合えた、私の人生に大きく影響するものとなった。この期間で得たものを今後の学習に生かし、日中の相互理解に貢献できる仕事に就く夢に向かって精進していきたいと思う。

このプログラムの企画・運営をしてくださった日中友好協会の皆様に感謝申し上げます。

「研修に込めた思いと目標」 後藤七波

中国に行くという経験は、私にとっては今回が3度目であり、到着直後は中国に対して「懐かしさ」を感じた。私は中国の独特な解放感と親近感が大好きである。今回参加した学生の中には、初めて中国を訪れるという学生も多かった。食事に必ずと言っ

ていいほどスプライトやスイカが登場すること、など中国での“初体験”をする学生が羨ましく思えた。私は、今回のこの感想文で訪中 5 日間に込めた思いと自分の目標について述べたいと思う。

11 月下旬、日本中国友好協会都道府県支部の担当者様から、今回のお話を頂いた。当時、訪中の日程が力を入れてきた部活動のイベントと被っていたこともあり、決断は非常に迷ったのが正直なところである。一晩考えて、参加する決意をした。それには大きな理由がある。私は 3 年の春、学内の中国公費留学の試験に挑んだ。それまでに 2 度通算 2 か月程度の短期語学留学を通して、ぜひ中国に身を置き、学びたいという思いに至り試験を受けたが、結果は不合格であった。試験を受ける前、もしもの場合は日本でできることに力を入れて頑張っていくと決めていた。今年の夏、中国語スピーチコンテスト朗読部門に参加させていただき、中国語を学ぶ多くの高校生の参加に驚いた。同時に、高校から中国語を学んでいる彼らに対してうらやましい気持ちにもなった。この経験は、私にとって中国語学習にさらに力を入れたいと思うきっかけとなった。朗読コンテストに参加して、いただいたご縁、中国を再び訪れたいというひそかな思い。この 2 つが今回参加する決断をした率直な理由である。

折角頂いた貴重な機会を有意義なものにしたいという思いから、積極的に取り組むことを訪中の目標としていた。まず私は、記録係を希望した。今までに 2 度訪れたことのある立場として、“初体験”ではない中国訪問の記録を残したいと思った。しかし、初めてではないといっても、首都北京の開発の雰囲気、街中に頻繁にみられるクレーン車によって感じられた。その多くが 2022 年の北京冬季オリンピックのための関連物だと知ったが、まだ現在進行形で発展し続ける中国には驚きを隠せない。次に学校交流では、漢方を作る体験をした。漢方医学を専攻して、本格的に漢方を学ぶ学生と出会い、中国における漢方医学の将来的な重要性を強く感じた。研修期間中ホテルに帰った後、時間があつたので近くのコンビニに友人と出かけた。特に何も買わなかったが、私は店員さんと少し会話した。人と話すのが好きな私の性格と中国人の気さくな性格は、非常にマッチしており、私はこの感覚が好きである。考えてみると、自分が日本にいる時に、日本を訪れた中国人に話しかけるのはとても勇気がいる。中国を訪れる側としての自分と、日本で中国人を迎え入れる側としての自分との間に、気持ちのギャップを感じることもある。後者の自分自身の積極性の低さは自分の課題であると改めて思った。

3 度目の中国への渡航では、初めて訪れた時のような文化の違いによる過ごしづらさを感じることはなく、違いを受け入れ順応し、その面白さを体感できる精神的な余裕があつたように思う。事前研修時、ご挨拶の中にあつた「悪い部分が日本の 10 倍あれば、良い部分も 10 倍ある」という言葉が思い出された。今回の参加は、違うからこそその良さを、模索しながら中国という国を見ることができたように思う。面白い中国文化の一つとして挙げるのができるのが“値切りを伴った買い物”である。この時は日本人ということを忘れ、遠慮をせずに値下げに挑戦する。交渉が成立してもしなくても店員さんと仲良くなれるのが嬉しい。初めて中国に来た際には、しつこい接客だと感じてしまい、それが苦手で中国独自の文化を楽しむことができなかった。それを楽しむことができるようになり、交渉も成立した。今回は自分の成長と達成感を味わうことができた。

日中大学生交流大会への参加は非常に光栄であつた。私は「朋友」合唱で、ステージに立たせていただいた。一生に一度あるかないかの貴重な体験であつた。学生と直接的な交流はなかったが、バスの車窓越しにお互いに顔を合わせ、私も含め連絡先を交換する学生もいて、関わりを持ち、お互いを知りたいという熱気が感じられた。今回の訪中を通して、友好交流を促進する団員の一人であると強く自覚することができた。将来は中国と関わり、中国語を運用して活動していきたい。

「“本物”の中国」 近藤 美咲

私が今回の訪中団への参加を通して一番感じたことは、「百聞は一見に如かず、百見は一考に如かず、百考は一行に如かず」ということである。実際に自分で足を運び、自分の目で見、自分の耳で聞き、自分が経験、体感し、現地の人々との関わりの中で得た学びこそが「本物」であるということを実感させられた有意義な 6 日間であつた。

今回訪問した北京は首都ということもあり、日本の東京を思わせるような街並みがところどころに見受けられた。しかし、どこをとってもそのスケールは日本とは比べ物にならないほど大きく、圧倒されたのを覚えている。歓迎会では、私たちを快く迎え入れてくださった北京市人民対外友好協会の方々をはじめ、中国政府、中国人民対外友好協会の方々のあたたかいおもてなしを受け、中国の伝統芸能や舞踊などを鑑賞し、国境関係なく、みんなで同じものを楽しみ、同じ時間を過ごし、その思い出を共有する素晴らしさを改めて実感した。また、北京城市学院大学の学生との交流では、中国の文化を体験するという貴重な機会をいただき、私は漢方薬作りをしながら学生との交流の時間を楽しむことができた。さらに、天安門や首都博物館、天壇公園や万里の長城など、中国を代表する数多くの場所を訪れ、その度に中国の長い歴史やハイレベルの芸術、文化を肌で感じることもできた。そして最も中国を肌で感じたと言えるのは買い物の場面であつた。押し売りやフェイク商品などを実際に目の当たりにし、驚いたのと同時に、これが中国の商売スタイルであり、これが文化として浸透しているのだと感じた瞬間でもあつた。そして実際に店員さんとの値切り交渉を通して商品を購入したことも、一つのコミュニケーションとして中国文化に触れることができた中国ならではの貴重な経験となった。

私は、今回が初めての中国渡航であつたということもあり、正直訪中前は、空気汚染や衛生面、治安面での不安などもあり、中国に対してはマイナスの印象のほうが大きかったように思う。しかしそれらの情報は、私が実際に見聞きしたわけでも体験したわけでもなく、ニュースやインターネット上の偏った不確かな情報でしかなかったということを、今回の訪中に参加したことで改めて

気づかされた。

私にとって、今回の訪中団に参加できたことは、非常に大きな意味を持ち、同時に、今後の学生生活、ひいては人生において、とても重要な機会であったように思う。この訪中で、中国に対する価値観や考え方が変わったのは言うまでもないが、それに加え、「人との出会い」ということを強く実感した。そしてそれが、今回の訪中に参加したことで得られたもう一つの財産であると思う。今回の訪中団は、関西関東合わせて約 200 名という規模での派遣団であった。それゆえに、日中交流にとどまらず、日日交流という、普段関わることのない全国各地からの他大学の学生とも交流できたという点が、この訪中団の最大の魅力ではないかと思う。また、ここで出会った友人と中国語の勉強をしたり、中国の観光を楽しんだり、たくさんの思い出を共有できたことは、本当に貴重でかけがえのない時間であったように思う。

今回のこの貴重な経験を活かし、今後はもっと日本と中国の友好、交流を促進できるよう、学生の立場から日中の関係を考え、交流活動ができればよいと思う。私たち学生が主体となり、両国の交流を担う当事者として、互いの文化や習慣の違いを認識し、相互理解につなげていくことが大切であると感じた。そしてこの訪中を通して出会えたすべての人への感謝を、今後の日中友好促進という形で還元していこうと思う。

「日本青少年代表団を通して感じた日本と中国の文化や考え方の違い」 田中誠実

自分は今回の日本青少年代表団を通して、本当に多くの事を学ばせていただきました。中国の文化や日本と中国の考え方の違い、目覚ましい発展を遂げている中国の経済などを、今回の訪中団を通して垣間見ることが出来ました。

まず事前学習の際、団員同士で自己紹介をしたのですが、中国語を学んだことがない人や、蘇州に留学していた人、ゼミの先生に言われて参加した人、果てには京都大学の医学部生など様々な人が、この訪中団に興味を持って参加していました。

関西空港から飛行機で北京につき、空港を出て一番に感じたことは中国の寒さでした。中国の寒さは日本の寒さと少し違い、乾燥していてピリッと張り詰めたような冷たさが特徴的でした。

また道路でも驚くべき事が多々ありました。車道ではクラクションを鳴らすのが当たり前で、その焦りからか、事故現場にも遭遇しました。原付に乗っている人は皆ヘルメットをかぶっておらず、二人乗りも当たり前に行われていました。また中国では歩行者よりも車が優先されているので、横断歩道を人が通っていても、突っ込んできました。そして、中国には人も車も多く、よく渋滞が起こるので、ナンバープレートの番号で通れる道が制限されていたりと、ユニークな対策が行われていました。

またお手洗いにも工夫があり、日本の男性用便器によく張ってある射的的の絵が中国ではハエの絵になっていました。ほかにもトイレットペーパーを使うには顔認証をしなければいけなかったり、「向前一小歩、文明一大歩」（一步前へ小さく進めば、それは文明の大きな一歩）という文字が男性用便器の前に書いてあったりしました。

食事に関しては、とても自分の口に合い、日本人でも普通に食べられる味付けでした。台湾の様に人を選ぶ香辛料味が無く、強いて言うなれば辛みが強い料理が少し多いかなというぐらいでした。そして、日本人が想像しているようなターンテーブルが実際に使われていました。

中国滞在三日目には、万里の長城、そして天壇公園とショッピングに行きました。万里の長城ではその日-9度を記録しており、人生で味わった事のない寒さでした。しかし実際に万里の長城に登ると、自分が想像していたよりも急斜面で、果てしのない階段道でした。それぞれの階段の高さの違いは気になりましたが、これを昔の人々は、人間の力だけで建てたのかと想うと、得も言われぬ感動が込み上げてきました。

夕方ごろにショッピングへ行き、お茶を売っている店に行ったのですが、そこでは試飲をさせてもらうことが出来、またコップを空にすると何度も何度も注ぎなおしてくださいました。これも中国の一つの文化なのだと感じ、中国人の大らかな人柄を見ることが出来ました。

そして四日目には中国の企業見学に行かせて頂きました。その会社は大きなテナントを有しており、そのテナント内の部屋を幾つもの会社に貸し出すという事業をしていました。そこでは食事や連絡、会議室の予約などを全て機械で行っており、日本よりも大分先進的なイメージを感じました。また昼寝専用の機械があるなど、日本ではまだ取り入れられないような物も多くありました。日本人はいつまでも中国の事を下に見ていますが、早急にその考えを改め、見習うべきところは見習っていくべきだと強く感じました。

そしてその日の午後には、今回の一大イベントである、日中大学生千人交流会がありました。この日中大学生千人交流会では日中青少年交流推進年である今年と来年の活動方針や、若者からの日中友好の考え方を推し進めるという話をされました。両国の青少年が自ら進んで交流を行うことによって、後々の両国の政治や外交にも良い方向で影響してくると自分は思います。

今回の訪中団を通して自分は人間的に成長させてもらったなと思います。今回得た経験を忘れず常に念頭に置き、これからの人生を歩んで行きたいと思います。

「中国の魅力に更に惹かれた旅」 中悠汰郎

まず初めに、今回のプログラムを組んで下さった日中友好協会の方々、そして中国人民友好協会・中国日本友好協会・北京市人民対外友好協会と共に関わって下さった中国の多くの方々に感謝の意を表したい。

今回のプログラムで中国をより好きになり、より理解できるようになったと思う。つい二ヶ月前に中国、それも北京に行っていたため、今回の中国派遣は初めての中国というわけではなかったのが、新鮮な気持ち半分、懐かしい気持ち半分で北京に滞在することになった。今回個人的に強く印象に残ったのは大きく三点あったように思う。一つは、一緒に北京に滞在した日本人の仲間のこと。二つ目は中国の友人や中国人に対すること。三つ目はスケールの大きさに対して。

まずは日本人の仲間について述べたい。訪中団の中では随行員の方々を除くと、私は最上回生という立場で、どういう学びを得られるか、どういう関わりを持てるかということに対して若干の不安を抱いて参加した。しかし、皆が語学を中心に何らかの形で中国に対して強い関心を抱いていて、自分の真っ直ぐな想いを面と向かって伝えてくれる団員が多く、自分にとってもすごく刺激的な時間であった。また、みんなで囲む中華料理も最高で、毎回の食事の時間が楽しみで仕方なかった。

前回中国に行った際に出来た中国人の友達を会って話すことも出来、その時に感じたことは友人という存在の大切さだった。今後も自分が海外に行こうと思う時、関わろうと思う時、それは必ず大切な友人の存在を思い浮かべることになるであろうし、三度目になるけれどもまた北京にすぐにでも来たいと思っている自分がある。今回の訪中団は日中青少年交流推進年の先駆的な事業とのことであったが、私たち青少年が海外に大切な友人がいるということ、それは何よりも私たちの視野を広げてくれるし、相手の国への真摯な姿勢を作る大きな契機となるように思う。国際交流事業というものに対する理解が深まった旅であった。また「百聞は一見にしかず」という言葉があるように、今回の派遣でも中国人に対する日本で抱いていたイメージとは全く異なる優しさや大らかさについて感じることも出来た。周囲の中国に初めて来た団員も皆が中国を好きになったと喜んでおり、今回の訪中団の意義を強く感じた。

そして三つ目の中国のスケールの大きさについて。人民大会堂に招待していただき、日中合わせて千人の学生が一堂に会するイベントの催しがあり、そのスケールの大きさには本当に驚かされた。中国では派手に幕を張ったり、スピーチが行われたりと、日本とは少し違った雰囲気を感じる事が多く、一つ一つのイベントの見せ方が非常に上手であると感じた。参加している自分たちの気持ちが引き締まるような見せ方については、日本でももっと大々的に取り入れてもいいのではないかというように思う。万里の長城や天安門広場、天壇公園など中国の有名な観光地にもいくつか足を運ぶことが出来たが、どこもスケールが大きく色々な歴史を感じ、伸び伸びと過ごすことが出来た。この壮大さは中国の何よりの魅力だと思った。

今回の訪中団では、自分の人生の中でまた一ついい思い出が出来たと共に、中国をもっと好きになった。医学という自分の専門分野で将来中国に対して関わりを持つということについてもより具体的な目標の一つとして思い描くことが出来るようになると共に、中国語と英語を学習したいという思いもより強くなった。自分が少しでも日中友好の架け橋になることが出来るように頑張っていきたいと思う。

「初めての中国訪問による心境の変化」 平尾晃子

今回、私は日中友好協会の中国訪問に参加させていただき、内容の濃いとても貴重な体験をすることが出来ました。私自身、大学に入学してから、中国語に興味を持ち、三年生の秋に兵庫県日中友好協会主催の中国語スピーチコンテストに出場しました。そして、今回の中国訪問への参加の機会をいただき、是非参加させていただきたいと思いました。しかし、中国語や中国の文化に興味はあったものの、実際に今まで中国に足を運んだことがありませんでした。そのため、中国に訪問する前と後で少しイメージが変わった部分があります。まず、中国人に対するイメージです。訪中前は、実際に訪中経験のある人から、冷たい人が多いという話を聞いたことがあり、自分の中でそのイメージが定着してしまっていました。しかし、実際中国へ行き、現地の人々と触れ合う機会がありましたが、冷たいというイメージは全くなく、寧ろ親切で優しい人が多いのではないかと感じました。それを強く感じたのは、四日目にスーパーに買い物に行った時です。私達の訪中団約 200 名が、一気に買い物を始め、レジに並んだため、レジが物凄く混んでしまいました。現地の方々は、私達の団体のせいでかなり待たなければならなくなりました。しかし、そのような状況で、文句を言う方もおらず、私達全員の精算が終わるまで待ち続けてくれたことに対し、非常に優しさを感じました。他にも、私がいまだに中国語を話せないとなると、レジの人が身振り手振りで言いたいことを伝えてくれたり、この五日間の研修で、私の中国人に対するイメージはより良い方向へと変わった気がします。他に私のイメージの中で変わったのは、中国での貧富の差についてです。中国へ訪問した際、何度も私達に帽子や財布を売ろうとしている人々を見ました。万里の長城や天安門広場など、観光客の多い場所の近くであったり、私達がレストランから出てきて、バスに乗るまでの間などに声をかけていました。日本では、テレビでもそういった中国の現状はあまり見たことがありませんでした。それゆえに、日本でも見ないような光景を間近で見て、非常にショックを受けました。

私は今回の研修で、初めて中国を訪れましたが、この五日間の体験を通して、もっと中国について理解を深めたいと思いました。最初に中国に興味を持ったきっかけは語学(中国語)だったのですが、世界遺産を訪れ、中国の歴史を知り、また現地の学生と交流することで、自分の今まで知らなかった中国をたくさん知ることができ、今後もまた中国を訪れたいと思うようになりました。

さらに、研修の前にも中国語の勉強をしていたのですが、研修後には、より一層中国への思いが強くなったため、同時に中国語に対しても、もっと流暢に話したいと思うようになりました。そして、私は三年生で就職活動中ですが、今回の経験を通し、日本と中国をつなぐ架け橋となれるような仕事がしたいと考えるようになりました。例えば、今回私達が中国を訪問した時のように、日本に来る中国の方々にも、もっと日本を知ってもらえるようにサポートをしたり、中国語のスキルを活かして、日中間でコミュニケーションを取るための手助けをしたいと考えています。これからも、この中国訪問の経験を無駄にせず、自分が出来ることを精一杯頑張っていきたいと思います。

「中国に対してのイメージの変化」 藤原 葉月

初めての訪中、初めての訪中団参加は、自分自身にとってとても有意義なものになった。訪中団のような様々な大学の学生が似たような目的をもって交流するという機会は今までほとんど経験したことがなく、中国語をこれからも学び続ける意欲にもなり、さらに自分の視野を広げるきっかけにもなった。

私は、今年の春休みに、台湾へ1か月間短期の語学留学へ行った経験がある。その一か月間は、中国語を上達させる大きな経験になった。留学先を中国ではなく、台湾へ決めたのは、親の反対があったということが大きい。私の両親は、中国に対してどうしても悪いイメージ、危険な印象を持っているようだった。私自身も中国語を学ぶ前は、中国に対してニュースや歴史の授業で聞いたような知識しかなく、あまり良い印象を持っていなかった。

私が中国語を学び始めた頃は、中国語学習に対して強い熱意を持っていたわけではなかった。しかし、大学で教えてくださった先生のおかげで、中国語に対してだけでなく、中国という国に対してや、中国人に対するイメージも少しずつ良いものになっていった。実際に台湾に行ったことで、中国本土のことを実際に行き知りたいという気持ちが強くなっていったため、今回はとても良い機会となった。

両親は、団体での訪中なら私を送り出してくれたが、帰国後に中国での出来事を話しても、中国へのイメージは良くないままのようだった。私自身は、実際に中国を訪れてみて、中国に対して良くないというイメージは完全に払拭された。観光地でたくさんの方が目を光らせて観光客を監視している様子は他国ではあまり見ず、インターネット環境が制限されているのも中国ならではの感じたが、中国のことを何も知らないまま、ただ良くない、怖い国だとひとくくりにしてしまうのは良くないと思う。自分自身もまだ中国のことは知らないことのほうが多いが、この訪中を通して、少しずつでも自分の両親のように中国に対して良くないイメージを持っている人を減らすことができたらよいと考えた。

そのためには、まず自分自身が中国のことを良く知るべきだ。私は今、大学の講義で異文化コミュニケーションの授業を受けており、今回考えたことと重なることがいくつもあると感じた。中国人と交流し、相手の考えや特徴を知るとはとても大切だと考える。もちろん、「中国人とは〇〇だ」というようにステレオタイプ化するのはよくないが、できるだけ多くの中国人と関わることで中国のことを深く知りつつ、日本のことも伝え、相互理解を図れるようになりたい。また、私はゼミでサステナビリティと伝統工芸、特に大島紬の関係について調べており、伝統工芸について強い関心を持っている。そのため、長い歴史を持つ中国ならではの伝統工芸という切り口でも中国という国についてみていき、自分自身の中に新しい中国という国の良さを見出していきたいと考えている。

この5日間は、多くの大学生が中国に関して、中国語に関して興味を持っていることがはっきりとわかる訪中だった。今後、自分自身がどのように中国と向き合うべきかを考える時間となり、考えを実行するために、まずは中国語をさらに勉強しなければならないと強く実感した。また、北京の観光地をガイドと共に巡れたことは、自分の専門領域である観光学についても見識を広げ、今後の学びに活かすことができる貴重な機会になったと考えている。

正田幹樹

これから、今回の日中交流において僕が感じたことを書き記そうと思います。

私が今回の訪中において感じたことは主に三つあります。

一つ目は、自分で経験することの大切さです。私は今回の訪中が初めての海外渡航でした。生まれてからずっと日本で過ごしたとは言うものの、インターネットが発達した今の時代において、海外のあらゆる情報が自然と私たちのもとへ届いてくるものです。また自分で調べれば、画像や動画などを通して、街の様子や生活様式を容易に知ることが出来ます。そのため、海外について少しは知っているつもりでいました。また中国についても、距離が近いということもあり多くの情報がメディアを通して伝えられており、ある程度は分かっているつもりでいました。ですが、実際に中国に行くことができ、中国に対する印象が大きく変わりました。訪中以前は中国に対してあまり良い印象を持っていませんでした。言論統制が行われ、社会的監視が強化され、著しい経済発展により貧富の差が拡大している、といった、どこか窮屈で暮らし辛い印象を持っていました。ですが、実際に自分の目で見て、自分が思っているよりまだまだ発展の余地があり、暮らしている人たちも特に窮屈そうではないと感じました。街としてインフラも整備さ

れており、十分発展してはいましたが、中国が持つ人口や土地の広さ、技術力を持ってすれば今よりかなり発展した街を造りだすことが出来るのではないかと期待させる様なワクワク感を感じました。また働いている人を見ても空き時間に携帯を見たりお話をしたりして、気楽に過ごしており、日本で過ごす方が窮屈ではないかと思えるくらいでした。今回実際に中国に行くことで、自分が持っている印象や偏見は、頭の中の想像に過ぎず、自分の目で見てみないと何も知らないのと変わらないということを学びました。自分の五感を通して感じることの大切さ、素晴らしさを知りました。

二つ目は人の話を聞くことの大切さです。今回の訪中では、多くの見ず知らずの人達との交流が何度もありました。北京城市学院での大学生との交流や、同じ班内での交流、そして違う班や途中から合流した関東圏の大学生との交流など、本当に沢山の交流をしました。その中で、コミュニケーション能力、特に人の話を聞く能力の大切さを学びました。以前まではコミュニケーション能力と言えば、どれだけ自分のことを上手く話せるか、だと思っていましたが、今回の訪中で様々な人と話す上で、最も大切なのは人の話を聞く力、そして質問できる力だと感じました。人の話を聞き、質問を投げかけることで、さらに相手の深い話を聞き出し、また質問をする。こうすることで自分が得られるものを最大化することが出来るということを学びました。また城市学院での交流では、英語を専攻している大学生の方と話す機会がありました。自分は中国語はあまり分からなかったのですが、英語はある程度は会話をすることが出来たため、英語で多くの話をしました。その時、英語の勉強をしていて本当に良かったと思ったと同時に、中国語が話せたらもっと面白いコミュニケーションが取れたのではないかという悔いも出てきました。コミュニケーションは共通の言語を操れてこそ成り立つものですが、その言語を習得すれば、かなりの可能性が広がるなど感じました。ただ、異なる言語においても聞く力というのはコミュニケーションを取る際に最も重要になってくると確信したので、これから日本語で話す際にも聞く力、そして質問する力を意識して過ごしたいと思いました。

最後に、今回の訪中に対する感謝の思いを日中友好協会の皆様やその他、携わってくださった皆様に伝えたいと思います。皆様、本当に有難うございました。今回の訪中において、非常に多くのことを学ばせて頂きました。自分の肌で中国を感じられたこと、そして日中、日々交流を通して沢山の新たな発見がありました。こうした経験をすることができたのも、皆様のおかげです。本当にありがとうございました。今回の経験を活かし、これからも精進していきます。